

# 「演じる女たち3部作 ——ギリシャ悲劇からの断章」を 演出した3人の精鋭演出家たち

Mr. Ovlyakuli Khodjakuli / オブリヤクリ・ホジャクリ

Mr. Abhilash Pillai / アピラシュ・ピライ

Mr. Mohammad Aghebati / モハメド・アゲバティ



(左から) モハメド・アゲバティ ●イラン生まれ。イラン演劇で勢いのあるのは圧倒的に若手演出家。その一人として注目される。ミニマルで、観念的な作風が特徴/オブリヤクリ・ホジャクリ ●トルクメニスタン生まれ。1994年からウズベキスタンのタシケントで活躍。ロシア演劇、中央アジアの伝統、スーフイズムの感性の融合した個性的なスタイル/アピラシュ・ピライ ●インド生まれ。テリーの国立演劇学校で教鞭を取りながら、斬新な作品を次々と発表。いずれも強いメッセージ性と現代的な様式美が魅力

撮影：古屋 均

ホジャクリ(第1部)はメディアに、個の関係を社会的関係に昇華させた女性を見ようとし、アゲバティ(第2部)はイオカステに、タブーへの意思的な挑戦をイメージし、ピライ(第3部)はヘレネの存在を、現代の石油を巡る世界戦争に繋げようと試みた。3人は演

2005年である。共通素材としてジャパンファウンデーションからはギリシャ悲劇を提案し、演出家たちからは「女性」というテーマが提案された。こうして、非西欧世界の演出家たちが、普遍的な演劇となつているギリシャ悲劇に自分たちの現実をどう照射して再解釈するのかという課題と、女性を今日の世界が抱えるさまざまな問題を読み解く鍵にしようという演出家たちの意図は、1本の糸として繋がった。

日本を含む、インド、イラン、ウズベキスタンの4カ国が参加した「演じる女たち3部作——ギリシャ悲劇からの断章」(ニューデリー、東京、ソウルで上演)は、ジャパンファウンデーションが1990年代の初めから、東アジア、東南アジア、南アジア、と段階を踏んで進めてきた現代演劇共同制作の流れの中に位置する。今回は、南アジア随一の演劇大国インド、ロシア演劇と中央アジアの感性の融合した魅力的な演劇国ウズベキスタン、若手演出家の活躍目覚しいイランを選んだ。時代を切り取る鋭い視点と、それを視覚的に実現できる才能を持った演出家の3部作コラボレーションを目指して、3人が決定したのは



2007年10月6~8日、東京渋谷のBunkamuraシアターコクーンで上演された舞台から。上が「メディア」、左下が「イオカステ」、右下が「ヘレネ」の1シーン

出スタイルも思考もまったく異なり、当然、3つのパートは多様なものになったが、3本をあえて一緒に上演することで、今の私たちが生きる世界の多様性と危うさと、願わくば未来が浮かび上がることを期待した。ともすれば競争になりかねない3部作という形は、3人にとつても制作者のジャパンファウンデーションにとつても精神的なタフネスを要求し、実のところ、3人が余裕をもつて互いを見ながら作業できるようにしたのは、インド初演を終えてからである。しかし、日本の1週間後に行なわれたソウル公演を終えるころには、「同志への理解と尊敬は最高潮に達していた。」(畠由紀)